

生活文化産業学

(第 1・3 木曜日 午後 14 時～／成徳学舎)

2013 年度後期 第 1 回 生活文化産業のケーススタディ／各分野の最新動向

担当：大倉 朗寛

～講義の流れ～

1. はじめに／生活文化産業における各分野の最新動向 (16:00～／30分)
2. 生活文化産業のケーススタディ (16:30～／30分)
3. 起業よりも収入を上乗せできる副業を増やすこと (17:00～／30分)
4. ディスカッション、まとめ (17:30～／30分)

～内容～

1. はじめに／生活文化産業における各分野の最新動向 (16:00～／30分)

生活文化産業においては、各地域に固有の資源（地域資源）に付加価値を付けて商品を生産したり、サービスを提供したりすることができるプロフェッショナルな力量、つまり職人技が必要となる。これまでは、一つの職人技を磨き、「専門性」を高めて誰にも真似できないような高度かつ独自の力量を身に付けることが価値を高めることとして重視されてきたが、これからは、異なる分野あるいは異なる地域において複数の職人技を磨き、それらの複合で「創造性」を高めて自分だけのオリジナルな力量を身に付け、新たな価値を創出し続けながら新たな商品やサービスを提供することが重視されるようになってきている。

そこで重要なのは、本業以外に異なる分野や異なる地域に出向いて活動し、新たな経験や人脈を開拓してゆくことである。そういった活動を通して開拓された経験や人脈が、本業にフィードバックされ、本業を再生させたり、本業の事業展開を可能にするのである。本業以外の活動について、おおよそ以下のように分類されると考えられる。

- ・「本業」＝自分が実践したい活動や作業／報酬あり
- ・「副業」＝空いた時間で可能な活動や作業／報酬あり
- ・「趣味」＝自分が実践したい活動や作業／報酬なし
- ・「奉仕」＝世話になった人や地域へ還元する活動や作業／報酬なし

この中で特に、「副業」に注目したい。本業に影響しない形で副業を行うことができれば、収入の上乗せができて経済的な余裕が生まれ、より幸せな人生を実現することができる。後期のケーススタディとして、本業での起業よりも、副業の実践という視点から事例を取り上げさせて頂く。実は、報酬のない趣味や奉仕であっても少なからず副業や本業につながってゆくことに気付いてもらいながら生活文化産業についてディスカッションを深めたい。

平成 25 年 10 月 17 日(木)

2. 生活文化産業のケーススタディ (16 : 30 ~ / 30分)

3. 起業よりも収入を上乗せできる副業を増やすこと（17：00～／30分）

残念ながら、わが国において起業というのは非常に難しい。アメリカのように投資家が沢山いるわけでもなく、金融機関のシステムも原始的であるし、大企業も起業家への対応は厳しい。このような厳しい環境の中で、あえてリスクをとって一攫千金を夢見て起業するよりは、たとえ非正規雇用でもいいので、それを本業として収入基盤をつくり、その収入の一部を活用しながら、本業に影響しない形で副業を行い、収入を上乗せする方が、より少ないリスクで経済的な余裕をもつことができ、より幸せな生活を実現できる。

生活文化産業は、一部の成功者を生み出すような産業ではなく、各地域あるいは各専門分野で活動する方々が不要な競争をせず、お互いに協力しながら価値を高め、それぞれが生産する商品や提供するサービスを相互に享受し合う事業の集積としての産業である。

たとえば、これまでインターネットを介した通信販売は、同一の商品に対して価格競争を助長したり、あるいは同一のサイトに様々な商品を表示して同業種を過当に競争させる仕組みによって消費者主導の消費活動を促進してきた。その小さな積み重ねがデフレを加速し、地域経済、さらには日本経済を失速させてきた。

そこで、生活文化産業という新たな産業を形成してゆくにあたって、いかにこれまでのインターネットやマスメディアに依存し過ぎず、地域のつながりを再生しながら、新たな商品を生産し、新たなサービスを提供するという仕組みづくりを進めてきた。

それが、多目的カードを活用した地域活性化モデルである。名刺や会員証、チラシ、ポイントカードなどに活用できる多目的カードで、1セット（10枚綴り）100円で両面カラーの多目的カードを受注することができる。営業仲介料として1セット10円（1枚あたり1円）、生産補助作業料として同じく1セット10円（1枚あたり1円）の報酬を支払うことのできるため、これらの作業を「副業」として頂き、収入を上乗せして頂くことができる。さらに、この作業の集積が地域の商品やサービス、地域で活動する職人のPRとなり、その集積の結果として地域の活性化につながるのである。

この仕組みこそが、各地域のつながりを再生しながら、各地域に仕事を起こしてゆくことができるという、生活文化産業学としての一つの答えであり、すでに検証の結果、実現しうるということが検証できている。たかが1円、されど1円である。昔から、1円に笑う者は1円に泣くという。塵も積もれば山となるともいう。後は、一人ひとりの想いと行動にかかっている。本業は本業として、引き続き頑張ってください、空いた時間を有効活用して、あくまでも副業として気軽に取り組んでもらえれば幸いである。

4. ディスカッション、まとめ（17：30～／30分）